

## 検定制度の持つ多様な役割



東京理科大学総合研究機構教授  
博士(工学) 小林 恭一

気になっている一つの「伝説」がある。「阪神・淡路大震災の時、全国から駆けつけた消防隊のホースが各市町村でまちまちなため結合できず、長田区の大火を助長した。」という伝説だ。さらに尾鰭がついて、「このため、その後規格が統一された」とか、「緊急援助隊が創設された」などというものもある。

この伝説は「いかにもありそうだ」と思われるのか、マスコミでは枕詞のように使われ、国会での議論や防災関係の各種報告書などにも散見される。

この伝説が間違いであることは、検定制度を知っている者にとっては常識だ。結合金具が検定対象となっており、「各市町村でまちまち」などということはありません。

だが、火のないところに煙は立たない。伝説が出来上がる素地はある。規格統一が不完全で、「ねじ式」と「差込式」があるからだ。

「ねじ式」は、東京消防庁管内だけ（かどうかは確認していないが）で使われている。他の市町村に先駆けてこのタイプを配備したため、後で開発された便利な「差込式」に変更できなかったためだという。

従って、結合金具が合わないためにホースが連結できないことがあったとすれば、それは東京消防庁の応援部隊と他の市町村消防の部隊との間だけで生じたはずだ。これを教訓とした東京消防庁では、その後、相互に連結可能なコネクターを各車両に配備するようにした、と聞いている。

これで一件落着するはずなのに、「規格不統一」の伝説は、消しても消しても再燃し、今や世間的には「定説」のようになってしまっている。

ビックリしたのは、消防関係者の中にもこの伝説を信じている方が結構いることだ。検定制度のことは知っていても、消防用機械器具等の品質確保のための制度と思い込み、応援部隊のスムーズな活動のために結合金具の規格を統一することもその重要な役割だ、ということを知らないためだろう。そこに、マスコミや識者が誤った「定説」を流し続ければ、次第にそう思い込むようになっていても不思議はない。

消防庁も検定協会も、「検定制度の役割や仕組みを、もっと発信して来なくてはならなかったな」と、責任者の一人だった者の自戒を込めて、改めてそう思う。

---

ところで、私は、現在、東京理科大学で「先導的防災安全工学の東アジア教育研究拠点」作りのプロジェクトに携わっている。

東アジア諸国は、今、次々と離陸しつつある。主要都市に高層ビルが林立している様子は、東京も顔負けだ。高層・大規模・複合ビルが凄まじい勢いで建設され、内部には巨大なアトリウムが作られ、ビルなどの地下空間も拡大しつつある。日本が昭和40年代以降30年以上かけてたどった道を、10年かそこらで、より大規模になぞっているように見える。

新たな空間や新たな材料は、伝統的な建築物、工法、材料にはなかった新たな火災危険をもたらす可能性がある。

先日、北京の工事中の超高層ビルが火災になり、文字どおり火柱のように燃え上がって話題になったが、日本で報道されないだけで、東アジアで超高層ビルが火災になり、上階に何層にもわたって延焼した火災は、ここ半年だけでも数件に上る。

それでも死者がほとんど発生していないのは、それなりの対策が施されているためだが、現地に行って超高層ビルの防火対策を見ると、大惨事にならないのが不思議なようなものもある。

ビルの防火対策は、火煙の拡大を抑える一方で避難を容易にする建築面での対策、火災を早期に発見し消火や避難につなげる設備面や人的な面での対策、容易に着火せず受熱しても持ちこたえる材料や構造面での対策、消防隊の活動を容易にする建築計画や設備面での対策など、様々な技術の協働と相互補完によって成り立っている。

一方で、これらの対策が所定の性能を発揮するためには、設計図どおりに施工できる体制、確実に施工されているかどうかチェックする体制、設置されたものをきちんとメンテナンスして所定の性能を維持していく体制などの、基盤面の整備も重要だ。

そして、各種設備や材料が工場で生産された段階で所定の機能や性能を有することは、それらの大前提となっている。消防用機械器具等の検定が、戦後の新生消防庁の重要な役割として消防組織法に当初から位置づけられたのは、「それらの信頼性確保が防火安全対策の根幹をなす」という認識があったためだ。

東アジア諸国の防火安全体制を概観した限りでは、前者のような技術的な面では欧米諸国とそう大きな違いはないようだが、後者のような基盤面については、まだまだこれから、という国が多いのではないかと、という印象だ。

現在、私は前記プロジェクトの一環として、東アジアの防火法制と火災被害との関連を、日本が建築物の防火安全性を獲得してきた様々な協働と相互補完の仕組みやその成果と対比させる研究に取り組んでいる。このことにより、急激に変化しつつある東アジア諸国に参考にしていただける点、逆に日本が参考にすべき点などが明らかになると考えているからだ。私が旧建設省と消防庁で30年以上にわたって蓄積してきた防火安全に係る経験と知識を、急激に発展し変容しつつある東アジア諸国の安全水準の向上に少しでも役立てることができれば、という思いもある。

その中で、消防用の機械器具等の作動の確実性や信頼性を確保する検定制度のような仕組みの重要性についても、是非伝えて行きたいと考えている。